

1 水稲

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
葉いもち	平年並 (7月第1半旬)	平年並	・6月3日現在、本田初発は確認されていない。 ・巡回調査の結果、残苗放置率は平年よりも高かったが、残苗で発生は確認されていない。(-) ・感染には平均気温が20～25℃、曇りや雨が多いことが好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。(-)
イネドロオムシ	平年並 (幼虫加害最盛期) (6月第6半旬)	少	・成虫の産卵盛期は、平年並の6月第2半旬と推測される。 ・巡回調査の結果、発生量は平年より少なかった。(-)

2 りんご

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
斑点落葉病	-	やや少	・巡回調査の結果、発生量は平年と比べて少なかった。(-) ・定点調査ほにおけるアルタナリア属菌胞子の飛散量は平年と比べてやや多かった。(+) ・高温多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。(-)
キンモンホリガ	-	平年並	・巡回調査の結果、被害葉率は平年並、発生地点率は平年と比べてやや低かった。(-)
アブラムシ類	-	多	・巡回調査の結果、寄生新梢率は平年と比べてやや高く、発生地点率は平年並だった。(+) ・乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+)
モモンクイガ	平年並 (産卵盛期) 6月第4半旬	平年並	・向こう1か月の気温は平年並の予報となっている。(±) ・フェロモントラップ調査での誘殺は確認されていない。(-) ・前年の発生量は平年並だったことから、越冬量は平年並と推測される。(±)

3 なし

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
黒星病	-	やや少	・巡回調査の結果、発生量は平年並であった(±)。 ・前年の発生量がやや少かったことから、伝染源量はやや少ないと推測される。(-) ・20℃前後の気温と多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。(-)
アブラムシ類	-	やや少	・巡回調査の結果、寄生新梢率は平年に比べて低かった。(-) ・乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+)

4 夏秋キャベツ

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
アオムシ (モンシロチョウ)	-	やや多	・巡回調査の結果、発生量は平年並だった。(±) ・向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+)
コナガ	-	多	・巡回調査の結果、平年よりも寄生株率は高く、寄生頭数は多かった。(+) ・乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+) 防除情報第1号発表

5 きく

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
白さび病	-	少	・巡回調査の結果、発生は確認されなかった。(-) ・冷涼(17 前後)多雨が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。(-)
ハダニ類	-	やや少	・巡回調査の結果、寄生は確認されなかった。(-) ・乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+)
アザミウマ類	-	平年並	・巡回調査の結果、被害葉率は平年と比べてやや低く、発生地点率は平年並だった。(-) ・乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+)
アブラムシ類	-	やや多	・巡回調査の結果、寄生頭数は平年に比べてやや多かった。(+) ・乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。(+)

注) 予報の根拠・・・(+): 多くなる要因 (±): 平年並になる要因 (-): 少くなる要因
「平年並に少」: 過去10年間の発生量平均値が小さいため、発生が少ない状態が平年並
巡回調査は6月1～3日に実施

- 6月下旬までの発生予報と防除対策 -

巡回調査は6月1～3日に実施
定点調査は、大崎市古川(古川農業試験場)
天候予報は、仙台管区气象台6月3日発表を参照

1 発生予報

病害虫名	発生時期 (発生開始期)	発生量
葉いもち	平年並 (7月第1半旬)	平年並

予報の根拠

- (1) 6月3日現在、本田初発は確認されていない。
- (2) 巡回調査の結果、残苗放置率は平年よりも高かったが、残苗での発生は確認されていない。
- (3) 発病には平均気温が20～25℃、曇りや雨が多いことが好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期 (幼虫加害最盛期)	発生量
イネドロオイムシ	平年並 (6月第6半旬)	少

予報の根拠

- (1) 成虫の産卵盛期は、平年並の6月第2半旬と推測される。
- (2) 巡回調査の結果、発生量は平年より少なかった。

2 防除対策

(1) 葉いもち

- (イ) 残苗が、まだほ場に確認されております。残苗は本田でのいもち病の発生源になりますので速やかに処分してください。
 - (ロ) 箱施用剤による予防防除を行っていない場合は、各種水面施用剤をそれぞれの防除適期に散布してください(田植え時期を遅らせたところでも適期に散布してください)。
 - (ハ) 箱施用剤による予防防除を行った場合でも、発病が見られたときには茎葉散布剤で速やかに防除してください。
- (ニ) 葉いもちは、直接収量や品質に影響を及ぼす穂いもちの伝染源となります。病勢が進展してからの防除では十分な効果が期待できないので、水田をこまめに見回り、早期発見・早期防除に努めてください。

防除上の注意

粒剤を散布する場合、水田水深を3cm以上にし、それぞれ薬剤の湛水期間を守ってください。

パック剤は、3～5cmの湛水状態で均等に投げ込んでください。藻類や浮き草で拡散が阻害される場合は、粒剤等で対応してください。

茎葉散布剤を使用する場合は、耐性菌の出現や増加を避けるため、同一系統薬剤の連続使用や多数回散布は行わないでください。

茎葉散布には粉剤や液剤がありますが、周辺環境等への飛散に気をつけて下さい。また、剤の選定は飛散が少ないDL粉剤を選定する等して下さい。

(2) イネドロオウムシ

- (イ) 6月の気温が低温で経過すると成虫の産卵期間が長引き、幼虫の加害期間も長くなります。今後の気象経過に注意し、発生が長引く場合は追加防除を実施してください。要防除密度は最盛期の成虫密度100株当たり25頭または卵塊密度100株当たり80個です。

防除上の注意

カーバメート系薬剤や有機リン系薬剤に抵抗性を示す個体群が確認されているため、効果が十分でない場合は別系統の薬剤を使用してください。

「蚕注意マーク」等の表示がある薬剤は、事前に周辺の養蚕の状況等に注意を払い、残効性等の特性を考慮してから使用(時期)を決めてください。

(3) 斑点米カメムシ類

- (イ) 畦畔や農道、雑草地、休耕田等のイネ科雑草は、斑点米カメムシ類の重要な増殖源となります。計画的な草刈りを行い、カメムシ類の増殖を抑えてください。

参考資料

補植用残苗で発病した場合(発病取置苗)や発病した苗を移植した「持ち込み」の行われたほ場周辺での葉いもちの発生状況(1999.7.1の事例)



いもち病の病勢進展は1回の感染好適条件の出現により、発病取置苗などの伝染源を中心に約1kmまで拡大することが明らかとなった。(取置苗とは補植用の残苗のことです)

BLASTAMを公開中です。御活用ください。

<http://www.pref.miyagi.jp/byogai/H23/blastam/blastam-23.html>

(4) 麦類(赤かび病)

(1) 小麦

- (イ) **1回目の防除を適期(開花始期～開花期)に行うことが最も重要ですが、2回目以降の防除(1回目の7～10日後に2回目)も重要**です。ほ場をよく観察し、防除タイミングを逃さないようにしてください。

赤かび病による被害: 菌が産生するマイコトキシン(かび毒)による汚染と減収、品質低下(屑粒や被害粒の増大)

- (ロ) 防除後も降雨や曇天が続き、多発の恐れがある場合は、**農薬使用基準を遵守した上で、追加防除を実施**してください。
- (ハ) 「ゆきちから」は赤かび病の**抵抗性が弱い**ので、**3回防除が基本**です。2回目の防除の7～10日後に3回目の防除を実施してください。 **農薬の情報は発生予報第2号に掲載**
<http://www.pref.miyagi.jp/byogai/H23/pdf/yohou/zenbun/zenbunNo2.pdf>
- (ニ) **収穫時期が梅雨期と重なり、降雨や曇天で赤かび病が発生しやすくなります**。本年の生育は平年より遅れていることから、**熟期を確認し適期収穫**を行ってください。

(2) 大麦・小麦共通

- (イ) 登熟後期には発病穂は確認しにくくなるので、穂に緑色が残っている時期に、ほ場を巡回し発病状況を確認してください。また、倒伏により赤かび病の発生が助長されますので、倒伏した麦は収穫時に刈り分けてください。
- (ロ) **収穫物を過湿状態のまま放置すると、赤かび病がまん延しやすくなります**。収穫後は直ちに乾燥作業を行ってください。また、**調製時には粒厚選別や比重選別により赤かび粒を除去し二次被害の軽減に努めてください**。



コムギ赤かび病罹病穂1



コムギ赤かび病罹病穂2

薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。また、農薬を散布する際には周辺作物の収穫時期に注意し、農薬が飛散しないよう防止対策をとるとともに、散布農薬を必ず記帳してください。

農薬登録情報 http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

水田において水面施用剤を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を一週間程度とし、落水や掛け流しをしないでください。また、大雨が予想される場合には、散布した農薬が水系へ流出することもあるので、農薬の使用を控えてください。

農薬容器の空容器の野焼き(野外の焼却)は禁止されています。農薬の空容器の処理に当たっては、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適正に処理してください。

- 農薬危害防止運動実施中 (6月6日～8月5日) -

6月から8月にかけては、農作物等の病害虫が発生しやすく、同時にその防除のため農薬を使用する機会が多くなる時期です。宮城県では、6月6日～8月5日を農薬危害防止運動実施期間と定め、農薬の安全・適正使用を推進していますので、以下の点に注意して農薬を使用してください。

- 農薬の使用基準を守りましょう
- 農薬容器のラベルをよく読みましょう
- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 土壌くん蒸剤(クロルピクリン剤等)の取扱いに注意しましょう
- 農薬散布作業中・作業後の事故に注意しましょう
- 農薬を他の容器に移し替えるのはやめましょう
- 農薬を保管する際には鍵をかけましょう

- 6月下旬までの発生予報と防除対策 -

巡回調査は、6月1～3日に実施
定点調査は、名取市高館(農業・園芸総合研究所)
天候予報は、仙台管区気象台6月3日発表を参照

1 発生予報

病害虫名	発生時期	発生量
斑点落葉病	-	やや少

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、発生量は平年と比べて少なかった。
- (2) 定点調査ほにおけるアルタナリア属菌胞子の飛散量は平年と比べてやや多かった。
- (3) 高温多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期	発生量
キンモンホソガ	-	平年並

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、被害葉率は平年並、発生地点率は平年と比べてやや低かった。

病害虫名	発生時期	発生量
アブラムシ類	-	多

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、寄生新梢率は平年と比べてやや高く、発生地点率は平年並だった。
- (2) 乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期 (産卵盛期)	発生量
モモシンクイガ	平年並 (6月第4半旬)	平年並

予報の根拠

- (1) 向こう1か月の気温は平年並の予報となっている。
- (2) フェロモントラップ調査での誘殺は確認されていない。
- (3) 前年の発生量は平年並だったことから、越冬量は平年並と推測される。

2 防除対策

(1) 斑点落葉病

- (イ) 高温多湿等の気象条件により急激に症状が現れることがあり、収穫時期まで常に発病の可能性があるので、定期的に予防防除を行ってください。

(2) キンモンホソガ

- (イ) 発生の多い園では、成虫が蛹から羽化する時期を見極めて、適期(成虫～卵の時期)に防除を行ってください。
- (ロ) シンクイムシ類、ハマキムシ類、アブラムシ類等の防除を行う時に、キンモンホソガにも登録のある薬剤を選定することで、同時防除を行うこともできます。

(3) アブラムシ類

- (イ) 発生の多い園では、寄生した種を見極めて薬剤を選定し、防除を行ってください。
- (ロ) 薬剤防除を行う場合は、新梢等の寄生部位まで薬剤が行き渡るように散布してください。

(4) モモシンクイガ

- (イ) 産卵場所となりやすい、がくあ部を観察して産卵期を見極め、適期(産卵盛期)に防除を行ってください。
- (ロ) 園地周辺のもも、ウメ、スモモ等も含めて、被害果や芯折れ枝は、次世代の発生源となる場合がありますので、見つけ次第取り除き、水漬けする等適切に処分してください。
- (ハ) 多発園や常発園では薬剤散布の補助手段として、性フェロモン剤を使用することもできます。

防除上の注意

薬剤を散布する場合、病害では耐性菌を生じるおそれ、害虫では抵抗性を発達させるおそれがありますので、同一系統薬剤の連用は避け、計画的なローテーションを組んでください。

ボルドー体系をとる場合、薬害を生じるので、他の殺菌剤との近接散布をしないでください。

一部の殺ダニ剤で効果が低下している事例がありますので、散布後の状況をよく観察してください。

DDVP剤は薬害防止(落果・落葉)のため、落花後から6月中下旬まで使用しないでください。

薬剤は、葉裏や果実にも充分付着するように散布してください。

果樹(りんご)の農薬使用回数のカウントは、前作の果実収穫後から1サイクルが始まっていますので、使用回数に注意してください。

「蚕注意マーク」等の表示がある薬剤は、事前に周辺の養蚕の状況等に注意を払い、残効性等の特性を考慮してから使用(時期)を判断してください。

薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。また、農薬を散布する際には周辺作物の収穫時期に注意し、農薬が飛散しないよう防止対策をとるとともに、散布農薬を必ず記帳してください。

農薬登録情報 http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

農薬の空容器の野焼き(野外の焼却)は禁止されています。農薬の空容器の処理に当たっては、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適正に処理してください。

- 農薬危害防止運動実施中 (6月6日～8月5日) -

6月から8月にかけては、農作物等の病害虫が発生しやすく、同時にその防除のため農薬を使用する機会が多くなる時期です。宮城県では、6月6日～8月5日を農薬危害防止運動実施期間と定め、農薬の安全・適正使用を推進していますので、以下の点に注意して農薬を使用してください。

農薬の使用基準を守りましょう

農薬容器のラベルをよく読みましょう

近隣住民・周辺環境に配慮しましょう

土壌くん蒸剤(クロルピクリン剤等)の取扱いに注意しましょう

農薬散布作業中・作業後の事故に注意しましょう

農薬を他の容器に移し替えるのはやめましょう

農薬を保管する際には鍵をかけましょう

- 6月下旬までの発生予報と防除対策 -

巡回調査は、6月1～3日に実施
定点調査は、名取市高館(農業・園芸総合研究所)
天候予報は、仙台管区気象台6月3日発表を参照

1 発生予報

病害虫名	発生時期	発生量
黒星病	-	やや少

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、発生量は平年並であった。
- (2) 前年の発生量がやや少かったことから、伝染源量はやや少ないと推測される。
- (3) 20 前後の気温と多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期	発生量
アブラムシ類	-	やや少

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、寄生新梢率は平年に比べて低かった。
- (2) 乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。

2 防除対策

(1) 黒星病

- (イ) 樹幹内部の通風・採光を良くするため、適切な新梢管理を行ってください。
- (ロ) 果実・葉等の病斑は重大な伝染源なので、早期発見に努めるとともに、発病部位は園外へ運び出し適切に処分してください。
- (ハ) 本県では、例年6月上旬頃から新梢葉に病斑が散見され、収穫時期まで常に発病の可能性があります。伝染源量や多雨等の環境条件によっては、急激に症状が現れることがありますので、他の病害と併せて定期的に予防防除を行ってください。
- (ニ) 薬剤防除を行う場合は総使用回数に配慮し、天候や発病状況により散布間隔を短くするなど適期を失しないよう行ってください。

(2) アブラムシ類

- (イ) 発生が多い園では、寄生した種を見極めて薬剤を選定し、防除を行ってください。
- (ロ) 薬剤防除を行う場合は、新梢等の寄生部位まで薬剤が行き渡るように散布してください。

防除上の注意

他の病害虫と同時防除を行う場合は、それぞれの病害虫に登録のある薬剤を選定してください。
耐性菌出現防止のため、ストロビルリン系(アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル)の使用は年2回以内として、連用しないでください。
果樹(なし)の農薬使用回数のカウントは、前作の果実収穫後から1サイクルが始まっていますので、使用回数に注意してください。
「蚕注意マーク」等の表示がある薬剤は、事前に周辺の養蚕の状況等に注意を払い、残効性等の特性を考慮してから使用(時期)を判断してください。

薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。また、農薬を散布する際には周辺作物の収穫時期に注意し、農薬が飛散しないよう防止対策をとるとともに、散布農薬を必ず記帳してください。

農薬登録情報 http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

農薬の空容器の野焼き(野外の焼却)は禁止されています。農薬の空容器の処理に当たっては、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適正に処理してください。

- 農薬危害防止運動実施中 (6月6日～8月5日) -

6月から8月にかけては、農作物等の病害虫が発生しやすく、同時にその防除のため農薬を使用する機会が多くなる時期です。宮城県では、6月6日～8月5日を農薬危害防止運動実施期間と定め、農薬の安全・適正使用を推進していますので、以下の点に注意して農薬を使用してください。

- 農薬の使用基準を守りましょう
- 農薬容器のラベルをよく読みましょう
- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 土壌くん蒸剤(クロルピクリン剤等)の取扱いに注意しましょう
- 農薬散布作業中・作業後の事故に注意しましょう
- 農薬を他の容器に移し替えるのはやめましょう
- 農薬を保管する際には鍵をかけましょう

- 6月下旬までの発生予報と防除対策 -

巡回調査は6月1～3日に実施
 定点調査はほ名取市高館(農業・園芸総合研究所)
 天候予報は、仙台管区気象台6月3日発表を参照

1 発生予報

病害虫名	発生時期	発生量
アオムシ (モンシロチョウ)	-	やや多

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、発生量は平年並だった。
- (2) 乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期	発生量
コナガ	-	多

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、平年よりも寄生株率は高く、寄生頭数は多かった。
- (2) 乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。
[防除情報第1号発表 http://www.pref.miyagi.jp/byogai/H23/pdf/boujyo/boujyoNo1.pdf](http://www.pref.miyagi.jp/byogai/H23/pdf/boujyo/boujyoNo1.pdf)

2 防除対策

(1)アオムシ(モンシロチョウ)

- (イ) 成虫の飛来(産卵)状況、ほ場での発生状況を確認して、防除の要否を判断してください。
- (ロ) コナガやヨトウムシ等の防除にあわせて、本種に登録のある剤を選択することで、同時防除が可能です。

(2)コナガ

- (イ) 結球内を食害されると商品価値を著しく下げるので、発生が多い場合は結球前の防除を徹底してください。薬剤散布を行う場合は株全体によくかかるよう、ていねいに散布してください。
- (ロ) 薬剤の効果が高いのは、中齢幼虫の時期までです。早期発見に努めて防除を行ってください。
- (ハ) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので、登録されている希釈倍数・使用量、使用回数等を守り、系統の異なる薬剤をローテーション使用してください。
- (ニ) 既に薬剤抵抗性が発達している可能性もありますので、薬剤散布後は効果を確認し、効果が無かった場合は同系統の薬剤の使用を控えてください。
- (ホ) 本種に対し生物農薬(昆虫病原性糸状菌製剤)も登録されており、「野菜類」で使用できます。

(3)ヨトウムシ(ヨトウガ)

- (イ) ほ場を見回り、産卵状況や発生状況、食害痕の有無に注意してください。
- (ロ) 薬剤効果が高いのは、若齢幼虫の時期です。齢がすすむほど効果が低くなるので、早期発見に努め、葉裏にもよくかかるようにていねいに薬剤を散布してください。
- (ハ) 葉裏に数十～数百個をまとめて産卵します。孵化後、齢がすすむと分散して食害し、防除が困難になるので、卵塊は見つけしだい処分しましょう。

防除上の注意

「キャベツ」の登録薬剤の他に、「野菜類」、「あぶらな科野菜」の登録薬剤も使用可能ですが、事前に薬害の有無を確認してから使用してください。

キャベツは薬剤の付着が悪いので、展着剤を加用してください。

「蚕注意マーク」等の表示がある薬剤は、事前に周辺の養蚕の状況等に注意を払い、残効性等の特性を考慮してから使用(時期)を決めてください。

薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。また、農薬を散布する際には周辺作物の収穫時期に注意し、農薬が飛散しないよう防止対策をとるとともに、散布農薬を必ず記帳してください。

農薬登録情報 http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

農薬の空容器の野焼き(野外の焼却)は禁止されています。農薬の空容器の処理に当たっては、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適正に処理してください。

- 農薬危害防止運動実施中 (6月6日～8月5日) -

6月から8月にかけては、農作物等の病害虫が発生しやすく、同時にその防除のため農薬を使用する機会が多くなる時期です。宮城県では、6月6日～8月5日を農薬危害防止運動実施期間と定め、農薬の安全・適正使用を推進していますので、以下の点に注意して農薬を使用してください。

- 農薬の使用基準を守りましょう
- 農薬容器のラベルをよく読みましょう
- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 土壌くん蒸剤(クロルピクリン剤等)の取扱いに注意しましょう
- 農薬散布作業中・作業後の事故に注意しましょう
- 農薬を他の容器に移し替えるのはやめましょう
- 農薬を保管する際には鍵をかけましょう

- 6月下旬までの発生予報と防除対策 -

巡回調査は、6月1～2日に実施
 定点調査は、名取市高館(農業・園芸総合研究所)
 天候予報は、仙台管区气象台6月3日発表を参照

1 発生予報

病害虫名	発生時期	発生量
白さび病	-	少

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、発生は確認されなかった。
- (2) 冷涼(17 前後)多雨が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並、降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期	発生量
ハダニ類	-	やや少

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、寄生は確認されなかった。
- (2) 乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。

病害虫名	発生時期	発生量
アザミウマ類	-	平年並

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、被害葉率は平年と比べてやや低く、発生地点率は平年並だった。
- (2) 高温条件が発生に好適であり、向こう1か月の気温は平年並の予報となっている。

病害虫名	発生時期	発生量
アブラムシ類	-	やや多

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、寄生頭数は平年と比べてやや多かった。
- (2) 乾燥条件が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は少ない予報となっている。

2 防除対策

(1) 白さび病

- 罹病したきくが原因となって感染が拡大するので、罹病葉は早めに摘み取り、ほ場から運び出し適切に処分してください。
- 発生初期は下位葉から発病することが多いので、下位葉裏の初期病斑を見逃さないようにして、早めに防除を実施してください。薬剤散布を行う場合は、下位葉裏にもていねいに散布してください。

(2) 害虫(ハダニ類, アザミウマ類, アブラムシ類)

- 寄生頭数が増加する時期を迎えます。多発してからでは防除が困難になるので、ほ場をよく観察して発生初期に防除を徹底してください。

防除上の注意

花き類・観葉植物等のグループ名で登録のある薬剤を使用する場合は、事前に薬害の有無を確認してください。

品種によっても薬害の状況が異なるので、初めての組み合わせで使用する場合は、使用上の注意をよく読む、試験的散布をする等して事前に薬害の有無を確認してください。

薬剤耐性菌の出現又は薬剤抵抗性が発達するおそれがあるので、系統の異なる薬剤をローテーション使用してください。

「蚕注意マーク」等の表示がある薬剤は、事前に周辺の養蚕の状況等に注意を払い、残効性等の特性を考慮してから使用(時期)を判断してください。

薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。また、農薬を散布する際には周辺作物の収穫時期に注意し、農薬が飛散しないよう防止対策をとるとともに、散布農薬を必ず記帳してください。

農薬登録情報 http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

農薬の空容器の野焼き(野外の焼却)は禁止されています。農薬の空容器の処理に当たっては、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適正に処理してください。

- 農薬危害防止運動実施中 (6月6日～8月5日) -

6月から8月にかけては、農作物等の病害虫が発生しやすく、同時にその防除のため農薬を使用する機会が多くなる時期です。宮城県では、6月6日～8月5日を農薬危害防止運動実施期間と定め、農薬の安全・適正使用を推進していますので、以下の点に注意して農薬を使用してください。

- 農薬の使用基準を守りましょう
- 農薬容器のラベルをよく読みましょう
- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 土壌くん蒸剤(クオルピクリン剤等)の取扱いに注意しましょう
- 農薬散布作業中・作業後の事故に注意しましょう
- 農薬を他の容器に移し替えるのはやめましょう
- 農薬を保管する際には鍵をかけましょう